



蓄の育ち方

3月の終わりの頃に、少し肌寒い日が続いたせいか、今年は早咲きだった桜も、4月に入っても散らずに残ってくれた。おかげで、満開の桜の中で、年度初日の「なかよし会」(新入園家庭の歓迎会)を迎えた。

桜の開花は、冬のしつかりとした寒さを越えることで、そのスイッチが入ると聞いた。しかし、この地球規模の温暖化が進むと、そのスイッチが入り難くなる。南へ下るほどその傾向が強くなるので、どんどんと開花が遅くなっていく。その結果、なんと北の寒い地方の方が、桜の開花が早まる可能性があるというのだ。

北上する桜前線という言葉も、いつかなくなってしまうのかもしれない。

蓄の時期の重要性というのは、実は人間も変わらない



いというのが、生命の不思議なところ。一見、静的にも見えるこの乳幼児期を、しっかりと遊び込んでいくことが、この後の開花のスイッチを入れていく。無理やり周囲を暖めて、開花を急かすほど、それは遅くなるのかもしれない。...というような内容を、このコロナ禍で、短縮コンパクトに開催した先の会の中で、少し時間を気にしながら、これまたギュッとコンパクトにお話をした。

そして、この満開の桜に乗じて、先日、子育て広場「いずみ」で、「さくらフェスタ」と銘打った、ちよつとしたイベントを開催した。

何と言っても換気と通気、窓という窓を開け放ち、半ば外ですか?というくらいを指したので、当日の快晴にまず胸を撫で下ろす。

子育てを通して、多世代が関わり合う場を目指す「いずみ」。他機関や他団体の協力を得て、高齢者の方

「ひぐらし」に寄せて

「暮らし」という言葉の響きには、そこに集う人たちの日々の苦楽や、それに伴う努力や知力、そして、やがてそこに醸成される慣習や文化といったものを感じる。

今に夢中な「その日暮らし」

いつかに思いを馳せる「あの日暮らし」

今日こそはと挑む「この日暮らし」

子どもも、大人も...それぞれの毎日の営みが積み重なって、このもう一つのおウチの中に、私たちらしい文化を漂わせていきたい...本誌タイトル、「ひぐらし」にはそんな思いを込めている。

今年度も毎月、園長の勝手な思いを、つらつらと書き連ねていくので、どうかお付き合いをいただきたい。

にもホスト役を担ってもらったり、立ち寄りやすいコーナーやブースを設定したりと、少し様子を伺いながら、そおつと仕立ててみた。

向かいの小学校入学式への参列を終え、急いで駆けつけてみると、思いの外盛況ぶり。前の歩道を覆う満開の桜と相まって、その賑わいが実に眩しかった。

この地域の福祉に関わる人たちとのささやかな繋がり...傍で、そうした蓄も膨らんでいたことを、あらためて知ったのだった。

そのブースの中で、大妻女子大の学生が、バルーンで動物などを作って、子どもたちに手渡してくれていた。

その前には、少しめかし込んだ、見覚えのある子どもたち...それは、ちょうど入学式を終えた卒園児たちだった。中には、「もう僕は、そういうのはいいんだ。」と、なぜか1日にして先輩へと変貌を遂



げた、スーパー一年生もいた。ちょうどこの日が、地域の小学校の入学式と重なることも、実は計算に入っていたことを、イベントを企画した副園長から聞いたのは、後日のことだった。

するとこの後、お昼頃になれば、入学式を終えた卒園児たちが、三々五々、ランドセルに背負われるように、その晴れ姿を見せに来てるのだろうか。呼び鈴の音に、幾度となく聞き耳を立ててみるのだが、今年はまだ、ひと家庭。

聞けば、その家庭は都合が悪かったが、比較的職員たちが応対しやすい午睡時間に、みんなで待ち合わせしているとのこと...園を知り尽くした皆さんの...手慣れたご配慮に...感謝。

新入園児、進級園児、ついでに新一年生...たくさんさんの蓄たちに、エールを。

園長 折井誠司

- 編集 幼保連携型認定こども園せいひ
- 編集人 折井 誠司
- 印刷所 折井 誠司
- 発行所 幼保連携型認定こども園せいひ

〒192-0364 東京都八王子市南大沢5-1-2
電話 042-675-1155
ファックス 042-677-5643
Email sebi@kodomoakyo.jp
http://kodomoakyo.jp